

<学術論文>

テレビのメディア・バイアスと教育世論の構成

—教員報道/少年報道から見えてくるもの—

酒井真由子 上田女子短期大学幼児教育学科
越智康詞 信州大学学術研究院教育学系
紅林伸幸 常葉大学大学院初等教育高度実践研究科
加藤隆雄 南山大学人文学部心理人間学科

キーワード：テレビ，メディア・バイアス，教育言説，世論，マルチモダリティ分析

1. 問題の所在

本稿は、マスメディア、とりわけテレビというメディアのメディア特性（バイアス）に注目しつつ、「教育世論」が構成される仕方について、理論枠組みの検討ならびに経験的データの分析という両アプローチを往還させつつ、解明しようとするものである¹。

これまで、Ph.アリエス（1960=1980）を嚆矢とする心性史や言説研究は、教育という営みが、子どもについての語りや教育的心性と連動しつつ構築されてきたものであり、決して普遍的で合理的な基盤の上に成立しているわけではないことを浮き彫りにしてきた。教育社会学の領域においても、教師や子どもがいかに語られてきたか、その語りにはいかなる特徴があるか、そうした語りが教育の政策や実践にいかなる影響を与えてきたのか等々、について知見を蓄積してきた²。しかし、これら教育社会学的研究は、①教育言説の記述・分析に終始し、教育の言説やイメージがそれを通して生産される「媒体」については、ほとんど注意を払ってこなかった。②新聞、雑誌、書籍といった文字・活字メディアを分析対象とする研究が主で、テレビ、インターネットといった音声・映像（視聴覚）メディアの分析については、ほとんど手つかずだった、などの限界がある³。

本稿ではテレビメディアを分析の対象としているが、このことはわれわれが「(教育)世論」の構成に関心を抱いていることと深い関連がある。まず「教育世論」は、教育に関する全般的印象や、不安・要求・規範的期待など、言語的／非言語的を問わず、さまざまな要素を混在させて構成されたものである。だが、こうした要素をただ寄せ集めただけでは世論とはいえない。世論には「他者の観察を観察可能にするメディア」(Luhmann, 2000=2013)である、という特徴が備わっている。つまりそれは市民の諸々の情動や要求が、そこに映し出されることで二重化されたものなのである。だからこそ世論は、社会的な「力」を持つのだ。

マスメディアは、こうした二重化を最も効果的に実現する装置である。デモもまた、人々の政治的要求を他者に「観察可能にする」示威行為であるが、こうした政治活動が行われる

ことは稀である。日常的には、マスメディアが市民の政治的要求を集約・代弁する役割を果たしているといつてよい。現在、インターネットの影響がもはや無視できないほど強まりつつあるのは事実だが、マスメディアは、依然としてこの社会の「基幹メディア」(藤竹 2012)であり、なかでもテレビはあらゆる年齢・階層に浸透した、圧倒的に日常化されたメディアなのである。教育世論の構成やその力を捉えるうえで、このメディアの特性(バイアス)についての理解を深めておくことは、決定的に重要である。

2. なぜメディア／世論構成に注目するのか

ところで今回、世論／マスメディア(テレビ)を分析対象に選定したのは、「教育」、「政治」、「世論」相互の関係において、「世論」の重要性がかつてなく高まっている政治システム／教育システムの現代的位相に鑑みてのことである。

まず、政治を巡る状況についてであるが、社会が近代化し機能分化の進んだ今日、「政治」、「行政」、「公衆」の関係は、ハイパーキカルに構造化された権力関係から、双方向的に影響を及ぼし合う相互循環的なシステム(Luhmann, 1981=2007)へと移行している。こうした移行により「政治」と「公衆」を媒介する「世論」の意義・役割が拡大してきているのだ。とりわけ、各政党の固定的支持基盤が崩れ、政治が流動化しつつある現在、「政治」は「世論」の中に「公衆の意向」や「公衆から見た自己の姿」を観察し、自らの行動を調整するよう強いられているといつてよい。教育は操作しやすく、「世論」への影響も大きな領域であるだけに、「政治」のターゲットにされやすいという特徴をもつ。

教育自体の変化もまた、「教育」と「教育世論」の関係の深まりを招いている。高度成長期までの教育における「公衆」は、まだ教え導かれるべき存在としての「大衆」であり、彼らが教育の在り方についてあれこれ口を出すことは少なかった。これに対し高度成長期が終焉して以降の「公衆」は、「市民」として、高い教育意識と多様な要望をもつようになる。そして、さまざまな病理現象の出現や社会問題化が象徴するように、彼らのまなざしは学校の内部へと注がれるようになってきている。今や教育は市民の主要な関心事のひとつであり、しかもその語りに誰もが自由に参加できるようになった。つまり、必ずしも専門家ではない人々の意識・感情・要求の影響を受けやすい領域となったのである。

こうした状況は一方で民主化・透明化として称揚され、他方で衆愚政治と批判されたりするが、こうした二項対立的な議論を行う前に、私たちは教育についての(外部の)語らいが、特殊な現実構成作用をもったマスメディア、とりわけテレビメディアによって媒介されているという事実、もう少し目を向けてもよいのではないだろうか。

3. メディア分析の基本視角

さて、本稿におけるアプローチの特徴は、教育世論の構成において、マスメディアなどのメディアの作用や効果に注目する点にある。だが、メディアの作用や効果を観察するのは容易でない。なぜなら私たちは、観察／行為／コミュニケーションを行う際、(観察の)対象

／（行為の）帰結／（コミュニケーションの）伝達内容・意図に心を奪われ、そのあいだを満たし媒介するメディアそれ自体については、これを意識のソトに置きがちだからだ。メディアにとっては、その存在が忘却されることこそがその理想であるとすらいえる。そこでメディアの特質や効果を観察するにはある種の理論的な道具（補助線／バイアス）が必要となる。

本稿が導きの糸とするのは、「メディアはメッセージである」というマクルーハンのテーゼである（McLuhan, 1964=1967）。ここで「メッセージ」とは、個別の情報内容というよりも、その効果や影響、とりわけ私たちにとっての環境（環世界／リアリティ）を構成する作用それ自体のことである。たとえば私たちはなにがしかの道具・技術・メディアを用いて何事かを成し遂げようとするが、そうした道具・技術・メディアの使用が逆に私たちの可能性空間（環世界や目的意識）を構成し返しているのである⁵。なかでも、「（表音）文字」という道具・メディアは、こうしたメディアとしての性質を最もよく体現した範例的なメディアであるといってよい。このメディアの効果により、私たち（人類）においては、世界や他者との関係、さらには人間（主体）自身との関係が、大きく再編されることとなった。文字の使用は時間・場所を越えたコミュニケーションを可能にし、主体の行為や思考を文脈から切り離し、距離を置いてこれを観察し対峙することを可能にする。他方、こうした「視覚」の特権化は、視覚を他の諸感覚から切り離し、人間と世界との関係を「主体」対「対象」という形式へと特化させるものとなる。

このようにメディア（手段・媒体）によるリアリティや可能性空間の構成効果を、ここではメディアの「バイアス」と呼ぶことにする。ただし、ここでバイアスと呼ぶからといって、それがただちに「間違っている／悪い」ということを意味するわけではない。そもそもメディアのおかげで世界は開かれるのであり、メディアが構成する世界の外部に「ありのままの世界／真実」が存在するわけではない。しかし「真理／真実」といった絶対的基準がないからといって、メディアのバイアス＝現実構成効果の功／罪を問うことが無意味になるわけではない。ただ、その判定は、あくまでも文脈の中で（条件つきで）なされるべきものだろう。さしあたって私たちにはできるのは、バイアスが生じる仕方を丁寧に観察し、それぞれの文脈の中でそれが持つ意味や効果を吟味することである。

本稿はテレビのメディア・バイアスを考慮しつつ、それが教育世論の構成にいかなる影響を及ぼしているのかを観察するが、その際、主にテレビメディアが有する次の二つの特性に注目する。ひとつは映像と音声を統合し、瞬時に世界を結びつけるなどの特性をもった＜電子（音声・映像）メディアとしてのバイアス／現実構成効果＞であり、もうひとつは国民全体を巻き込み、「送り手」「受け手」を分離するなどの特徴をもつ＜マスメディアとしてのバイアス／現実構成効果＞である⁶。

＜電子メディアとしてのバイアス／現実構成効果＞

先に触れたように、近代人（西欧文明）は、印刷革命以降、文字（視覚）メディアに親しみ、その中で構成された基準に沿って進歩を目論んできた。しかし、メディア分析の視角か

らすれば、そうした分析的合理性を偏愛すること自体、ある「特殊な＝バイアスのかかった」現実構成であるに過ぎないのであった。

マクルーハン（1964＝1967）によれば、テレビメディアは、映像を活用するメディアでありながら、上記のような視覚メディアではなく、あらゆる角度から情報との接触が行われ、対象との境界が曖昧で距離がとれない聴覚メディアまたは触覚メディアとして分類される。テレビの音声・映像は、「手を用いるように」見ることを要請するものであり、「人や事物の多くの瞬間、相、側面からなる全体包括的」（McLuhan, 1964＝1967, p.434）なアイコン的イメージを提供するものなのである。

第二にテレビは、書き言葉、印刷本、写真、ラジオのような精細度の高い情報を提供するホットなメディアではなく、諸感覚を包摂し圧縮されたイメージを提供する（話し言葉、漫画のような）クールなメディアである。詳細で隙のない説明に長時間さらされることは苦痛だが、多義的かつ曖昧で、自由な解釈に開かれたテレビによる報道は、視聴者を想像的／創造的な活動へと巻き込み、飽きさせない力を持つ。

さらにテレビのような電子メディアは、瞬時に世界を駆け巡り、共通の情報・映像を送り届けることで、（物理的にはそこにはいない）視聴者を「歴史的な瞬間」に立ち会わせる。衝撃的な出来事が生じる場面に共に居合わせているとのライブ感覚や、歓喜、感動、怒り、無念さなど情動の共有を通し、感情の共同体が立ち上がる⁷。

以上、多感覚的（触覚的）、クール（巻き込まれ）、共同体の一体感といったキーワードが出てきたが、これらはテレビを分析する観点＝仮説となるだろう。だが、本稿にとって問題なのは、テレビの一般的傾向を分析することではない。こうした性質をもつテレビメディアが教育に言及することで、いかなる教育世界のイメージや教育（行政・学校・教師などの責任者）への期待が構成されることになるのかである。たとえば、テレビではしばしば善／悪の二元論的ストーリーが使用される。もちろんこうした単純化は、複雑な現実世界をわかりやすく切り取り、効果的に伝達するといった認知的（視覚的）な要請からなされるものである。しかし、そこには常に、身体的・触覚的な要請も強く付随している。そしてここで観察すべきは、こうした非認知的要請がテレビメディアのアウトプットであるところの現実構成に一体いかなる影響を及ぼしているのか、という点である。テレビは単に加害者と被害者を二分するのではなく、視聴者を被害者と同一化させ、「われわれ＝正義」のポジションを打ち立てる。こうした配置の中、たとえば被害者である「子ども」は無謬で罪なきか弱い存在として描かれ、逆に「加害者・責任者」は、憎く・ふてぶてしい・凶悪な存在へと仕立て上げられることになる。なぜならそれが視聴者自身の利益・欲望（「美しい魂」の維持など）につながっているからである。

テレビによって構築されるこうした印象や情動は教育世論を構成するうえで大きな力を持っている。言説分析の視点だけでは、テレビメディアのこうした非言語的な仕掛けやそこから生まれる効果をうまく描き出すことはできない。後述するマルチモダリティ分析は、こうした複雑さを複合的に記述する方法である。

<マスメディアとしてのバイアス／現実構成効果>

テレビと教育世論の深いつながりを理解するには、このメディアが情報を多感覚的に伝達するひとつのメディア＝技術であるばかりでなく、そこで選択・伝達された情報が周知のものであることを全ての市民に対して観察可能にし、後続するコミュニケーションの共通前提を創出し、公式認定する「力」を保持したマスメディアであることを考慮しておく必要がある。

とはいえマスメディアを、権力性を帯びた一方通行的な情報伝達メディアとして理解するのは必ずしも適切ではない。ここではマスメディアを N.ルーマンの理論枠組みに依拠して「送り手と受け手の関係で同時に存在している者たちどうしのインターアクションといものが発生しない」(Luhmann,1996=2005,p.9) ことを特徴とするコミュニケーション・システムとして把握する。機械技術的手段の介在により「送信への意思」と「受信の興味」が分離され、直接的なフィードバック作用が制限されることで、マスメディア・システムに特有の(豊かな／歪んだ)コミュニケーション空間が開かれるのである。

このシステムにおける情報選択の原理において重要なのは次の二点である。ひとつは、このシステムは「真／偽」ではなく「情報／非情報」をコードとして作動するという点である。そのことによってこの社会は、たとえば常に新しさへの刺激を受け続けることになる。もうひとつは、このシステムは、システムの自己維持課題にかかわる自己準拠的な基準に依拠した情報選択と、システム課題からは独立した他者準拠的な基準による情報選択のあいだを振動しながら情報選択を遂行しているという点である。二つの選択基準を持つことで、当該システムが情報選択における高い自由度(豊かなコミュニケーション可能性)を確保する構造は他のシステムにもあてはまることだが、ただ、マスメディア・システムは、まさに私たちの社会におけるリアリティ構成の根幹に直結するシステムであるだけに、その情報選択(バイアス)の在り方は、慎重な検討に値する。

もちろんこれまでのマスメディア研究においても、その情報選択の在り方は常に大きな問題であり、「本来伝えるべき情報」が「営利目的」や「権力等の外在的な圧力」によって歪められていることなどが批判されてきた。しかし、これまで問題にされてきたのは、主に他者準拠的な面での情報選択の問題(権力、虚偽)についてである。確かに情報の「送り手」が、主観的には「受け手」や「伝達の仕方」に何の気遣いなく情報選択を行うようなケースでは、こうした外圧による情報選択の歪みをチェックすることが、現実的にみて有効な方法といえるだろう。しかし、「受け手」や「伝達」を気遣う必要がないことと、その影響が原理的に不在であることとは同じでない。コミュニケーション・システムである限り、自己準拠的な情報選択と他者準拠的な情報選択は常に作用している。受け手(伝達)への配慮が不要に見えるのは、それがいかなる情報であれ、情報の「与え手」は「真実の所有者」であり、情報の「受け手」は受容の拒否が許されない「教え導かれる存在」であることが自明視されるなど、コミュニケーションの成立が保障されているからだ。しかしながら現在、専門的な権威の崩壊などによって、まさにこうしたコミュニケーションの成立を保障する土台自体が

揺らぎつつあるのである。今日においてこのような（コミュニケーションの成立自体を自明視した）外在的な情報統制批判一辺倒では、分析の妥当性を大いに欠くことになるだろう。

従って本稿では、システムに内在的（自己準拠的）な情報選択に連動したバイアスに主要な関心を向ける。つまり見てもらうための工夫など、コミュニケーションの接続のための要請がその情報選択や構成の仕方にいかなる影響を与えるのか、その結果、どのような現実が構成されることになるのか、といった点についてである。

ただし、繰り返しになるが、ここで自己準拠的な要請の存在自体を否定したいわけではない。たしかに純粹に市民が知るべき情報の観点に立てば、視聴率を高めるための工夫や技巧など自己準拠的な要請は、情報を劣化させる元凶にみえるかもしれない。実際、番組制作の現場ではこの二つの基準のあいだの矛盾やジレンマに引き裂かれることになるだろう。だが、情報選択の基準にこうした矛盾やジレンマが存在することは、必ずしも悪いことではない。二つの基準をもつことで、ひとりよがりな情報も、ただ楽しいだけの情報も制限され、その両端のあいだで情報選択の幅が広がるからだ。

問題はむしろその偏りにあるといえるかもしれない。一方で、戦前の新聞やラジオがそうであったように、権力によって情報受容を強制し、視聴者の利益や関心（自己準拠的観点）を軽視すると、情報の偏りが生じるばかりか、その貧困化を招くだろう⁸。逆に、メディア間競争が激化し、情報の民主化が進む今日においては、視聴者に見ていただくための工夫やサービス等の自己準拠的な要請が過剰になり、「本来何を伝えるべきなのか」といったジャーナリスティックな理念自体が消滅の危険にさらされつつある。自己準拠への短絡（視聴率至上主義）が生じると——時間をかけた取材が減少し、出来事への意見を出来事として扱うなど情報の反芻化が進むといったように——公共的・専門的観点から見た情報価値が薄まり、さらには、——クイズ形式の多用、刺激的な見出しや映像／音響効果、不安の扇動、夢と感動の押し売りなど——視聴率の操作やコスト削減のためのテクニックが自己目的的に追求されることとなる⁹。テレビメディアの情報選択原理におけるこうした今日の傾向が、どのような現実構成効果を持つことになるのかについて、詳細に吟味していくことが求められる¹⁰。

以下では、以上の問題意識や分析枠組みを念頭に置きつつ、実際にテレビで報道されたデータを素材としながら、そこで教師や子どもがいかに描かれているのか、それが教育世論の構成にとってどのような意味をもつのかについて、分析を進めていくことにする。

4. テレビメディアによる教育言説のデータベース化の方法

4.1 データベース化の難しさ

テレビメディアを対象とする教育言説研究が遅れてきた背景に、理論的な関心の薄さ以外にもいくつか現実的な要因がある。第一はデータの取り扱いの困難さである。新聞や雑誌は誰もが容易に記録として残せるが、テレビメディアの情報は録画しない限り残らない。第二に映像データの特質として、情報量と分析観点の膨大さが挙げられる。同じ出来事を伝えるにも、映像の使い方、場面の切り取りやストーリー展開のあり方により、そのニュアンスは

異なってくる。接続する文脈や後続する出来事により、その意義は変化していく。さらに、テレビメディアは一つのカットだけでも映像や語りのセットで構成されているため、分析の観点も膨大となる。第三に、著作権等の規制が厳格であるため、研究者間でのデータの共有が困難であることもその要因として挙げられるだろう。特に地上波デジタル放送は、映像にコピー・ガードシステムが組み込まれており、録画した映像をコピー（複製）して研究者間で共有したくてもコピーの回数が限られる。

しかし、近年の録画機器の性能向上により、いくつかの問題点は解消されつつある。ハードディスクの大容量化は、長時間録画や大量のデータ収集を可能にした。また、1台の録画機器で同時に複数番組の録画が可能になった。さらに映像の削除やチャプター設定が容易になるなど、編集機能も向上した。ハードディスクからDVDに容易に保存し、コンパクトに保管できるようにもなった。

4.2 データベース化の方法

以上のような現状の中、本研究では高性能でありながら比較的手に入りやすい（廉価な）録画機器を使い、4名の作業者の協力のもと、テレビメディアによる教育言説のデータベース化を行っている。データベース化の方法は以下の通りである。

- ① 作業地・作業者：関東と関西の2地域（関東2名、関西2名）
- ② 作業期間：2013年7月～現在に至る
- ③ 対象局：地上デジタル放送局9【関東：NHKと民放キー局系4局（TBS、テレビ朝日、日本テレビ、フジテレビ）関西：民放キー局系4局（毎日、朝日、読売、関西）】
- ④ 対象番組：各局の定時のニュース、ワイドショー、報道番組（不定期の特集、ドキュメンタリーを除く）（録画対象番組の詳細は省略）
- ⑤ 対象情報：国内の子どもや教育に関連するニュース及び報道¹¹
- ⑥ 作業手順：各作業者が2局ないし3局を担当し、各局の④に示す全番組をブルーレイ・ハードディスク・レコーダーで予約録画する。⇒ 録画番組のうち、⑤に上げた情報以外の情報を削除し、該当する情報をハードディスクに残す。⇒ ハードディスクに残したデータについて、日付、番組名、情報のインデックスを作成する。⇒ 各データをテレビ局・月ごとにブルーレイディスク及びマスター・ハードディスクに保存し、コピー10の許容範囲内においてメンバー間でデータを共有する。

4.3 データ・インデックス・カードの作成

データベース化に伴う作業として、本研究では、データ・インデックス・カードの作成を行った。データ・インデックスは、テレビ映像をデータ化する重要な作業である。データ・インデックスの作成にあたっては以下の4点に留意した。

- ① 報道の情報間の分析と情報内の内容の分析が可能になること
- ② 内容の質的・量的分析に利用できるものであること
- ③ 固定的でなく発展的に項目の追加が可能であること
- ④ カード化されていること

以上の点を踏まえて本研究ではエクセルを用いて、以下のデータ・インデックス・カードを作成した。

報道内容																				
番組																				
放送局																				
放映日																				
放映時間																				
カット別データ																				
パート	カット番号	カットの概要	誰が	どこで	何を	効果1(情報)	効果2(メディアミックス)													

図 1 データ・インデックス・カード

(注) 画像は、シート1のメイン・インデックス画面である。シート2以下は各パート別にカード化したデータ画面となっている。なお、記入方法の詳細は本文の分析を参照のこと。

5. 教育関連報道における分野ごとの報道回数と報道内容

教育報道の分析をはじめるにあたり、まずは現在、日本のテレビはどのような内容の報道を、どのくらい取り上げているのかについて概観しておくことにしよう。以下ではテレビ局を支える制度的・財政基盤（主に広告収入に依拠するか否か）の違いにより、情報選択にどのような差異が生じるのかという関心から、局による違いについても調べてみた。

表1は、2014年4月1日から4月30日と、2014年12月1日から12月31日の、NHK、日本テレビ、フジテレビのデータベースをもとに、教育関連報道を分野ごとに集計した結果である¹²。

表 1 教育関連の報道内容の分野別分類（数字は報道回数）

日付	テレビ局	政策		少年犯罪	事件・事故	イベント	社会現象	裁判	学校教育	スポーツ	その他	計
		選挙										
2014/4/1～ 4/30	NHK	14	0	11	15	9	1	3	24	2	48	127
	日テレ	6**	0	24	69**	17	7*	8	10**	9	45	195
	フジ	8	0	18	51**	10	4	7	9**	3	30	140
2014/12/1～ 12/31	NHK	6	5	4	5	1	1	0	6	0	24	47
	日テレ	1**	0**	14	31**	6	4	6	6	1	27	96
	フジ	3	3	11	27**	1	4	8*	3	1	23	81

(注) 報道局ごとの録画番組の合計数（4月／12月）は、NHK（190／197）、日本テレビ（130／135）、フジテレビ（152／158）である。なお*、**は教育関連の報道における当該分野の報道頻度において、NHKとのあいだに有意差が見られるもの（片側検定で*は $p<0.05$ 、**は $p<0.01$ ）。

まず、全体的傾向として「少年犯罪」や「事件・事故」に関する報道が頻繁になされている様子が伺える。教育関連報道の実に41%が「少年犯罪」と「事件・事故」の報道で占められている¹³。では、局別の違いはあるだろうか。まず2014年の4月のデータから見てみよう。「政策」に関する教育関連報道はNHKが14回に対し、日本テレビ6回、フジテレビ8回、「学校教育」は、NHKの24回に対し、日本テレビ10回、フジテレビ9回

テレビのメディア・バイアスと教育世論の構成

とNHKで多くなっている。一方、「事件・事故」は、NHKが15回に対し、日本テレビ69回、フジテレビ51回、「社会現象」では、NHKが1回に対し、日本テレビ7回、フジテレビ4回と民送において報道頻度が高くなっている。表1からわかるように、12月においても4月とほぼ同様の傾向がみられる。以上から、「政策」と「学校教育」に関する報道はNHKにおいて、「事件・事故」、「社会現象」に関する報道は日本テレビ・フジテレビにおいて、より頻繁に取り上げられているといっていよう。

次に、それぞれのカテゴリー内における具体的な報道内容の違いについて調べてみた。表2は、「政策」に関する報道のテロップを示したものである。これを見ると、3局とも「国民投票改正案」に関する報道を取り上げているが（表2網掛け部分）、NHKでは、さらに「養子縁組」、「教育委員会制度」、「教育支援」など、多様な内容の政策について報じ

表2 「政策」に関する報道のテロップ

月	テレビ局	日にち	番組名	テロップ	キーワード
4月	NHK	4/3(木)	ニュースウオッチ9	特別養子縁組 実親の同意なくても	養子縁組
		4/4(金)	ニュース	“新教育長”“総会議”教委制度見直し閣議決定	教委制度
		4/8(火)	おはよう日本(7時)	改憲手続き 国民投票法改正案と野党7党が衆院提出	国民投票改正案
		4/8(火)	ニュース	国民投票法改正案 「与野党7党が衆院提出」年齢「18歳以上」に引き下げる	国民投票改正案
		4/8(火)	ニュースウオッチ9	国民投票法改正案と野党7党が提出 施行から4年後に「18歳以上」に	国民投票改正案
		4/8(火)	NEWS WEB	国民投票法の改正案 衆院に提出	国民投票改正案
		4/10(木)	おはよう日本(7時)	千葉市“待機児童ゼロ”	待機児童
		4/11(金)	おはよう日本(7時)	改正少年法 刑の上限引き上げ「遺族から厳罰化を求める声が上がっていた」	少年法
		4/11(金)	ニュース	改正少年法 「衆院本会議で可決・成立」「犯行時18歳未満の少年 有期刑上限引き上げ」	少年法
		4/20(日)	おはよう日本(7時)	教育支援など議論 「7月外に政府大綱」阿部首相	教育支援
		4/20(日)	おはよう日本(7時)	千葉浦安「フィンランドで実施の子育て支援策導入」	子育て支援
		4/20(日)	ニュース	教育委員会制度見直し	教委制度
		4/22(火)	おはよう日本(5時)	産科医療保障制度 樹金1万6000円に減額決定	医療・出産
		4/22(火)	おはよう日本(7時)	教員免許のあり方など議論「6・3・3・4」制見直しで教員免許のあり方は	教員免許
	日テレ	4/3(木)	news every	国民投票は「18歳以上」案	国民投票改正案
		4/3(木)	NEWS ZERO	投票18歳以上で、合意	国民投票改正案
		4/9(水)	news every	4年後に投票18歳以上…、18歳以上から国民投票 高校生は…不安・大丈夫？	国民投票改正案
		4/9(水)	NEWS ZERO	国民投票18歳に引き下げ	国民投票改正案
		4/12(土)	ズームイン！！サタデー	刑の引き上げ…少年法	少年法
		4/24(木)	news every	代理出産など限定許可へ	代理出産
	フジ	4/6(日)	新報道2001	「4年間で待機児童ゼロに」保育園増設に“高いカベ”	待機児童
		4/9(水)	めざましテレビアクト	国民投票改正案 与野党7党が提出	国民投票改正案
		4/9(水)	めざましテレビ	国民投票改正案 与野党7党が提出	国民投票改正案
		4/1(火)	スーパーニュース	親権「ハーグ条約」が日本で発効	ハーグ条約
		4/11(金)	めざましテレビアクト(4:25-)	千葉市も「待機児童ゼロ」横浜市はゼロ継続「厳しい」(東京新聞)	待機児童
		4/11(金)	めざましテレビ(5:25-)	千葉市も「待機児童ゼロ」横浜市はゼロ継続「厳しい」(東京新聞)	待機児童
		4/11(金)	めざましテレビ(5:25-)	千葉市 保育所の待機児童 初のゼロに	待機児童
12月	NHK	12/2(火)	ニュース7	(選挙関連)衆院選2014党首に問う自民党、公明党 “社会保障の充実”は	子育て支援
		12/2(火)	ニュースウオッチ9	政治・経済・社会記者が読み解く、“アベノミクス”評価と課題は	子育て支援
		12/7(日)	おはよう日本(7時)	(選挙関連)社会保障制度のあり方でも論戦	子育て支援
		12/7(日)	ニュース7	(選挙関連)日曜日の選挙戦 党首の訴え	子育て支援
		12/9(火)	ニュースウオッチ9	(選挙関連)党首を追って 民主海江田代表	子育て支援
		12/28(日)	ニュース7	都が保育士昇給で費用助成へ	保育士
	日テレ	12/23(火)	news every	子育て支援制度	子育て支援
	フジ	12/10(水)	スーパーニュース	(選挙関連)突然の残業どうする？働くママが抱える悩み、子育て	子育て支援
		12/9(火)	スーパーニュース	(選挙関連)アベノミクスだけじゃないニッポンの姿と「争点」、少子化	少子化
		12/7(日)	新報道2001	(選挙関連)いかに子どもを増やすか？検証！各党公約の“本気度”	少子化

ている。一方、日本テレビは「少年法」と「代理出産」、フジテレビは「待機児童」と

「ハーグ条約」について報じているが、同じ内容の報道を何度も繰り返していることがわかる。

次に、「社会現象」についてもその具体的内容を比較しておこう（表3）。3局とも、「インターネット」や「スマートフォン」、「ソーシャルメディア」について取り上げているが、NHKでは「母親の子育てサイトの使用」をテーマ化しているのに対し、日本テレビは「LINEで買春 きっかけは掲示板」、フジテレビは「小6 女兒がガールズバー勤務 親が知らないLINE実態」など、少年少女のLINEやスマートフォンの利用について報じている（表3 網掛け部分）。また、民放では「少女の性」についての報道も目立つ。

表3 「社会現象」に関する報道のテロップ

月	テレビ局	日にち	番組名	テロップ	キーワード
4月	NHK	4/18(金)	ニュースウォッチ9	事件から1か月 母親たちは…“紹介サイトは必要”戸惑う母親	子育てサイト
	日テレ	4/2(水)	NEWS ZERO	LINEで買春、きっかけは掲示板	LINE
		4/2(水)	news every	LINE利用し少女買春	LINE
		4/3(木)	news every	ネット上に“不適切な書き込み”スマホ片手に“掲示板監視”「えん希望」下着販売も	ネット・スマホ
		4/6(日)	真相報道バンキシャ!	夜9時以降スマホ制限 賛成する親…小中学生は?	ネット・スマホ
		4/9(水)	NEWS ZERO	ネットで下着売る 少女を“サイバー補導”の一部始終	ネット・スマホ
		4/17(木)	NEWS ZERO	横浜「JKリフレ」摘発のワケ	JKビジネス
		4/21(月)	スッパリ!!	若年層…メールよりライン(読売新聞より)	LINE
	フジ	4/3(木)	とくダネ!	小6 女兒がガールズバー勤務 親が知らないLINE実態	ガールズバー
		4/4(金)	めざましテレビアーク	これが最新流行? 話題のプリクラポーズ	プリクラ
		4/10(土)	めざましテレビアーク	女子中高生に流行中 ナゾのプリクラ	プリクラ
		4/16(水)	めざましテレビ	10代、20代の通信手段 メールからソーシャルメディアに	ソーシャルメディア
12月	NHK	12/12(金)	おはよう日本(5時)	刑法犯罪関連 子ども狙った連れ去り事件増加	連れ去り
	日テレ	12/6(土)	ウエークアップ! ぶらす	詐欺に利用される少年たち	詐欺
		12/11(木)	news every	子どもの連れ去り 増加傾向	連れ去り
		12/11(木)	NEWS ZERO	子どもの連れ去り 増加傾向	連れ去り
		12/17(水)	news every	リストカットやめられない女子高生	リストカット
	フジ	12/8(月)	とくダネ!	「JK」女子高生ビジネスの誘惑	JKビジネス
		12/8(月)	ニュースJAPAN	「JKビジネス」店摘発 怪しい店内で…	JKビジネス
		12/12(金)	めざましテレビアーク	子どもの連れ去り事件が100件に	連れ去り
		12/12(金)	めざましテレビ	子どもの連れ去り事件100件超	連れ去り

以上、局別の教育報道の傾向性について概観してきた。以上の結果から、必ずしも広告収入に頼る民放では、「政策」や「学校教育」に関する報道は少なく、「少年犯罪」、「事件・事故」など、世間的な関心を引きやすい刺激的なテーマを取り上げ問題化する傾向が強い、といった一般的な結論が導けるわけではない¹⁴。いわんや、「民放の報道は怪しいが、NHKは信頼できる」といった単純な結論を出すことには慎重でなければならない。広告収入に依存しないNHKにおいても、決して視聴率の呪縛から自由ではないし、逆に政治権力に統制され情報内容が偏るといったリスクもある¹⁵。ただ、本稿の問題関心に即して言えば、メディアに対する外的圧力とは無関係に、メディア自身の内的傾向性（自己準拠的な要請）によって子どもの危機が煽られ、さらなる教育的配慮を求める世論が刺激されるなどの可能性があることについて、ひとつの傍証を得られたといえそうだ。

6. テレビメディアにおける報道事例の分析

6.1 マルチモダリティ分析

テレビにとって教育は格好の題材である。なぜならそれは誰もが経験したことがあるなじみの深いテーマであり、なおかつ「教師」や「子ども」は、この社会において文化的に価値

づけられ期待を付与された特別なカテゴリーであるからだ。

そこで以下では教育の主要な登場人物である教師と子どもがテレビメディアの中でどのように描かれ、そのイメージが創出され・再生産されているのかを、実際の報道を事例として詳細にみていくことにする。ここではマルチモダリティ分析の手法を援用するが、まずはこの方法について簡単に紹介しておく。

伊藤（2006）によれば、映像、音声、音響、文字といったものすべてが、社会的な意味作用を作り出す媒体であり、複合的な要素から編まれたテレビ・テキストは、複雑な意味作用を作り出している。つまり、テレビメディア分析においては、言語以外の諸要素を無視することはできない。「ニュース・テキストを構成する諸記号の、言語的、映像的、音響的な様態」（伊藤、2006、p.34）を記述するマルチモダリティ分析は、言語的／非言語的を問わず、さまざまな要素を掬い上げることに適した方法である。マルチモダリティ分析では、音声言語、テロップ、効果音、挿入映像に映っているものなどが記述の対象となる。

本稿では分析にあたり、「カット」と呼ばれる断絶のない映像を最小単位とした。対象とする報道をカットごとに「カットの概要」、「誰が（ものの場合もある）」、「どこで」、「何をしているか」に分類して記録し、カット別データを作成した¹⁶。カット別データを作成することで、報道の形式や流れ、頻出度の高い人やものなど番組全体の構成要素や映像の特徴を把握することができる。

続いて、対象とする報道の特徴的な部分（連続的なカット）を抜き出し、「誰が何を語っているか（語り）」、「画面に何がどのように映し出されているか（ヴィジュアル構成）」、「何がどのように記述・表示されているか（テロップ）」を記述した。そうすることで、複雑なテレビメディアの報道内容の物質的効果の記述が可能となり、＜見てもらうための工夫＞や、視聴者をドラマの世界へと巻き込んでいくプロセスを明らかにすることができる。

本研究では、「教師」と「子ども」に関する報道事例として、2014年4月14日にフジテレビ『とくダネ!』で報道された「高1担任教師が入学式欠席」と、2015年2月20日から3月上旬にかけて各局で頻繁に報道された「川崎市中1男子生徒殺害事件」を取り上げ、分析を試みることにする。

6.2 議論の場に視聴者を巻き込むプロセス—教員報道「高1担任教師が入学式欠席」—

(1) 教員報道「高1担任教師が入学式欠席」の概要

第一の報道事例は、2014年4月14日にフジテレビ『とくダネ!』で放送された、ある高校で1年生を担当することになった教師が、高校1年の自分の息子の入学式に参列するため、職場の入学式を欠席したという内容の報道である（以下、「高1担任教師が入学式欠席」）。この高校教師は法や規則に違反する行為を行ったわけではないにもかかわらず、テレビメディアにおいて、議論すべき「問題／ネタ」として扱われたケースである。表4は「高1担任教師が入学式欠席」のカット別データ、表5は表4のカット番号1から5を抜き出して「語り」、「ヴィジュアル構成」、「テロップ」を記述したものである。

表 4 フジテレビ『とくダネ!』で放送された「高1担任教師が入学式欠席」のカット別データ

パート	カット番号	カットの概要	誰が	どこで	何を
問題提起	1	スタジオ、菊川、小倉、梅津	菊川	スタジオ	—
概要の説明	2	誰もいない教室	****黒板、教卓、机、椅子	教室	—
	3	校舎と桜(学校)	****校舎、桜	学校	—
	4	入学式(新入生の名前を呼ぶ)	****生徒、壇上の人	体育館	立つ
	5	入学式の日の学校の昇降口	****昇降口、日の丸	学校の昇降口	—
	6	入学式(新入生入場)	****生徒、紅白の垂れ幕	体育館	入場する
	7	入学式	****生徒、壇上の人	体育館	座って話を聞く
	8	学校の廊下を歩く生徒	****生徒	学校の廊下	歩く
	9-10	女性教師からの手紙	****女性教師からの手紙	—	—
	11	入学式(入場)	****生徒、保護者	体育館	生徒が入場、保護者は拍手
	12	入学式(体育館全体)	****生徒、壇上の人、来賓	体育館	礼をする
	13	江野、家の門の前での会見	江野幸一県議(入学式来賓)	家の前	発言・返答する
インタビュー・会見・各メディアによる意見	14-17	新入生の母親と息子のインタビュー	担任が欠席したクラスの新入生の親子	家の中のソファ	発言・返答する
	18	新聞記事「担任、息子の入学式へ」	****埼玉新聞	—	ネットへの書き込み(否)と(賛)
	19-21	インターネット画面のスクロール	****インターネット	—	ネットへの書き込み
	22-23	中年女性の街頭インタビュー姿	中年女性	街頭	—
	24	27歳営業職女性の街頭インタビュー	27歳営業職女性	街頭	発言・返答する(否)
	25	22歳会社員女性の街頭インタビュー	22歳会社員女性	街頭	発言・返答する(賛)
	26-30	街頭インタビュー姿	中年男性・女性・年配女性	街頭	—
	31	56歳保険業女性の街頭インタビュー	56歳保険業女性	街頭	発言・返答する(否)
	32	41歳会社員女性の街頭インタビュー	41歳会社員女性	街頭	発言・返答する(否)
	33	女性教師のインタビュー姿	女性教師	室内	—
	34	男性教師のインタビュー姿	男性教師	車内	—
	35	入学式(入場)	****生徒、保護者	体育館	生徒が入場、保護者は拍手
	36	入学式(生徒が壇上にいる)	****生徒、壇上の人、来賓	体育館	生徒、校長が礼。来賓が見ている
	37	50代女性の現役中学校教師	50代女性	室内	発言・返答する(否)
	38	30代男性の現役小学校教師	30代男性	車内	発言・返答する(賛)
	39	埼玉県庁	****埼玉県庁	埼玉県庁	発言・返答する(否)
	40	授業中の光景	****生徒、先生	教室	授業
	41	授業中に教師が何かを読むような姿	****教師	教室	何かを読む
問題提起	42	入学式(入場)	****保護者、生徒	体育館	入場
	43	入学式	****生徒、壇上の人	体育館	着席、壇上の人話をしている
スタジオでの概要の説明、論評	44	スタジオでのトーク。以下、省略。 小倉・菊川・梅津(キャスター)、森本さやか(プレゼンター)、石戸・山本(コメンテーター)。まずスタジオで森本が経緯、街頭インタビューと教育評論家・尾木直樹の意見を伝える。その後、出演者による論評。途中、森本がヤフーニュースの円グラフを紹介する。スタジオ内では次のような意見が出る。A.労働者の権利/B.職業倫理に反している/C.家庭を大事にという雰囲気広がっているなか社会が対応できていない/D.やむにやまれない事情があったのでは/E.こんなことになるなら入学式に父兄は同伴しないでとしたほうが簡単/F.若い人はワークライフバランスを教えられているので若い人が休んでいいという意見を言うのはわかる。ただ職種によって休まないほうが良い日がある/H.女性が教師になるという選択ができなくなる/I.このような議論が出てきたことはよいこと、など。		スタジオ	

(注) 映像が資料映像である場合には、「誰が」の欄にマーク(****)をつけている。また映像が人ではなく「もの」の場合もある。

表 5 効果音とテロップによる問題提起

画面右上のテロップ: 息子の高校入学式優先で波紋／高1担任教師が入学式欠席／賛否両論			
カット番号	語り	ヴァジュアル構成	テロップ
1	MC(菊川): 担任の先生が入学式の日にいなかったらどう思いますか?	(スタジオ) MC3人。カメラ目線。	家庭優先し入学式欠席で賛否
2	ナレーション: 一人の教師のとった行動がいま波紋を広げている。	(教室内) 黒板、教卓、机、椅子。斜めから撮る(左下が下がり、右上が上がる)。	高1担任教師が入学式欠席賛否(右上)／波紋(右下に大きく)
3、4	ナレーション: 埼玉県内の県立高校でこの春、一年生の担任となった50歳代の教師が、入学式を欠席した。その理由は	(学校) 校舎と桜。体育館での入学式の様子。生徒と校長。	1年生の担任教師が入学式を欠席(欠席の文字大きく)
5	音: カーン	(学校) 昇降口、日の丸二つ。「入学式」という看板。	息子の高校の入学式に出席するため(真ん中)

(注) 「高1担任教師が入学式欠席」フジテレビ『とくダネ!』2014/04/14

(2) 視聴者を子どもの立場に立たせる冒頭

この報道は、「担任の先生が入学式の日になかったらどう思いますか」というキャスター（女性）による、視聴者への問いかけから始まる（カット番号 1）。「担任の先生が」という冒頭の言葉により、視聴者は子どもの立場から「どう思うか」を考えるよう誘導される。次に、映し出されるのは教師も子どももない教室の映像である（カット番号 2）。黒板、教卓、机、椅子といった、ありふれた教室内の映像であるが、視聴者はそこに居るはずの教師不在の黒板と教卓を見ることになる。しかも、教室は右上がり左下がりの斜めに映し出されており、子どもの心の不安を暗示するような映像の構成となっている。

続いて、校舎と桜、体育館での入学式の映像と共に、「埼玉県内の県立高校でこの春、1 年生の担任となった 50 歳代の教師が、入学式を欠席した。その理由は…」とナレーション（カット番号 3, 4）が入る。そしてその直後「息子の高校の入学式に出席するため」というテロップが「カーン」という効果音と共に、画面の真ん中に表示される（カット番号 5）。ここでは教師が欠席した理由を音声言語によってではなく、テロップと効果音で伝えているのである。視聴者は問いの答え（余白）を埋めるべく、能動的にその理由を読むよう促されるのだ。

(3) 視聴者の情動的な関与を強める多種多様な語りの展開

続いて報道は、「入学式に来賓として参列した県議会議員の語り」、「街頭インタビュー」、「現役教師の語り」、「インターネットの書き込みの紹介」、「スタジオでの論評」へと次々と展開していく。「同一テーマ／ネタ」についての異なる語りの反復によって、視聴者は消費者的な関心を刺激されながら議論に巻き込まれ、情動的な関与を強めていくことになる。

スタジオ内での議論の様子を見てみよう。そこでは 4 人のキャスターと 2 人のコメンテーター、プレゼンターがそれぞれ異なる役割を担い、多種多様な論評を加える。まずプレゼンターが、街の声や教育評論家の意見を「労働者の権利」と「職業倫理」を巡る対立として整理する。A 氏は「やむにやまれない事情があったのでは」と教師の心情に寄り添おうとするが、この言動は「こんなことになるなら入学式に父兄は同伴しないほうがよい」という B 氏の怒りに満ちた口調の発言を誘発する。これに対し C 氏は「若い人はワークライフバランスを教えられている」と世代間対立の観点から、D 氏は「女性が教師になるという選択ができなくなる」と働く女性の立場から B 氏の興奮した態度を諷める冷静な反論を展開する。本音をぶちまけ怒りを露わにする者がいて、それに抗する多種多様な意見が立体的に提示される場が構築されることで、視聴者は反発心を刺激され続ける一方、共感すると同時に溜飲も下げられるような理知的な意見に出合う機会も増大し、論争に自然に参加させられていくのである。こうした議論はたわいもない娯楽に過ぎないともいえるが、教師をネタにしたこうしたモラル談義が、マスメディアにおいて演出されればされるほど、学校や教師に対する暗黙の要求やプレッシャーも強まっていくのではないだろうか¹⁷。

6.3 感情の共同体の形成—少年報道「川崎市中 1 男子生徒殺害事件」—

(1) 少年報道「川崎市中 1 男子生徒殺害事件」の概要と報道回数

少年に関する報道として、本稿では2015年2月20日に川崎市多摩川の河川敷で、川崎市に住む中学1年生の男子生徒が、知り合いの少年らによって殺害された事件を取り上げる（以下、「川崎市中1男子生徒殺害事件」）。

表6は、2月20日から3月31日のあいだに本事件が、NHK、日本テレビ、フジテレビにおいて、（全録画番組数中）何回報道されたかを示したものである。20日の男性の遺体発見、21日の被害者の身元判明の頃の報道は週末ゆえ報道回数自体が少ないため目立たないが、23日から報道回数が急増していることがわかる。遺体発見から1週間後の27日に「少年3人の逮捕」、3月2日に「リーダー格の少年が殺害を認める供述」についての報道が行われるまで、各局ともほぼ毎回この事件を取り上げているのだ¹⁸。要するに当時、本事件はいわば早朝から深夜まで報じられていたものであり、こうした露出度の高さは、事件の重大性や深刻さを視聴者に伝える作用をもつ。「いつテレビを見てもこの報道がなされている」という事実は、「誰もがこの事件について知っている」ということを「誰もが知っている」状態を作り出す。

表6 「川崎市中1男子生徒殺害事件」の報道回数（事件の報道回数／全録画番組数）

日にち	NHK	日テレ	フジ	日にち	NHK	日テレ	フジ	日にち	NHK	日テレ	フジ	日にち	NHK	日テレ	フジ	日にち	NHK	日テレ	フジ
2月20日(金)	0/7	3/5	1/5	2月27日(金)	7/7	7/5	9/5	3月6日(金)	4/7	4/5	6/5	3月13日(金)	0/7	0/5	0/5	3月20日(金)	0/7	0/5	0/5
2月21日(土)	3/5	2/3	2/2	2月28日(土)	4/5	4/3	4/2	3月7日(土)	1/5	3/3	1/2	3月14日(土)	0/5	1/3	0/2	3月21日(土)	0/5	0/3	0/2
2月22日(日)	3/4	2/2	2/3	3月1日(日)	4/4	3/2	2/3	3月8日(日)	0/4	0/2	1/3	3月15日(日)	1/4	0/2	0/3	3月22日(日)	0/4	0/2	0/3
2月23日(月)	8/7	9/5	9/5	3月2日(月)	9/7	10/5	9/5	3月9日(月)	1/7	3/5	0/5	3月16日(月)	0/7	0/5	0/5	3月23日(月)	0/7	1/5	0/5
2月24日(火)	7/7	9/5	7/5	3月3日(火)	5/7	8/5	11/5	3月10日(火)	0/7	0/5	1/5	3月17日(火)	0/7	3/5	1/5	3月24日(火)	0/7	0/5	0/5
2月25日(水)	6/7	7/5	5/5	3月4日(水)	2/7	7/5	6/5	3月11日(水)	0/7	0/5	0/5	3月18日(水)	0/7	0/5	2/5	3月25日(水)	0/7	0/5	0/5
2月26日(木)	7/7	6/5	8/5	3月5日(木)	2/7	5/5	9/5	3月12日(木)	0/7	2/5	0/5	3月19日(木)	4/7	1/5	0/5	3月26日(木)	0/7	0/5	0/5

(2) 事件の解釈の仕方を示す冒頭

さて、テレビメディアが「川崎市中1男子生徒殺害事件」報道を繰り返し報じるには、視聴者が飽きずに見続けるための工夫や形式が必要である。それはいかなるものなのか。本研究では、2月22日のフジテレビ『Mr.サンデー』の「川崎市中1男子生徒殺害事件」報道を事例として取り上げる。本報道は、被害者の男子中学生の身元は確認されたものの、加害者については特定されていない段階のものである。

番組の冒頭、男性と女性のキャスターが大画面をはさんで立ち、この画面には顔に痣のある被害者の顔写真が大きく映し出されている。そして2人のキャスターによって事件の概要が語られる（表7）。ここでの語りは、すでにこれまでにメディアによって報じられてきたことである。次のカットでは、画面全体に顔に痣のある被害者の顔写真とともに「独自入手 1か月前の写真...事件との関連は？」というテロップが映し出され、ナレーショ

表7 事件の解釈の仕方を示す冒頭

カット番号	カットの概要	テロップ（一部抜粋）	語り
1	スタジオ、キャスター2人、被害者の写真（痣）		MC: 神奈川県川崎市の河川敷で中学1年生、市内に住む〇〇〇〇君（実名）が他殺体で見つかった事件です。 SC: はい、事件のおよそ1か月前に撮られた写真を独自に（MC:へえっ）入手しました
2	被害者の写真（痣）	独自入手 1か月前の写	男声のナレーション: 少年の左目の周りには痛々しい青黒い
3	被害者の写真（痣）		男声のナレーション: 痣。それでもカメラに向かってあどけない笑顔を浮かべるのは川崎市に住む〇〇〇〇さん（実名）13歳。

ンによって顔写真の叙述とこの写真の人物の実名と年齢が語られる。この時点では写真（痣）と事件との関連性はわかっていない。にもかかわらず、「痛々しい青黒い痣」と暴力の痕跡を伝えると同時に、「あどけない笑顔」と13歳（＝中学1年生）像を付与し、痣と笑顔のギャップが印象づけられ、写真（痣）と事件との関連性を視聴者にイメージさせる。この「あどけない笑顔」の子どもが、こんな「痛々しい青黒い痣」をつけられているというこの対比により、視聴者は「無垢な犠牲者」への思い入れを強化するようガイドされるのである。

(3) 被害者の写真とフリップボードによる事件の視覚化

冒頭での衝撃的な写真についての叙述と、殺害現場の様子や捜査状況の解説の後、殺害に至るまでの被害者の履歴が簡単なストーリーにまとめられ、紹介される。

まず、「会ったら挨拶をしてくれて、気軽に話しかけてきて普通にいい子でした」と同じ学校に通う生徒が、被害者の人格や内面のありようを語ったインタビューが映し出される。続いて、ナレーションの語りとともに、被害者の笑顔の写真と画面真ん中に、「バスケットボール部」、「明るい」、「人気者」というテロップが次々と表示される。さらに、小学校の卒業文集に、転校前に住んでいた離島のことや中学生になったらバスケット部に入るとの抱負が書かれていたことが伝えられる。卒業文集と「都会」のかかわりは全くないが、テロップには「都会での学校生活への抱負」と表示さる。このシークエンスでは、被害者の笑顔の写真、友達と肩を組む写真、クラス写真など5種類の写真が6回映し出されている。

その後、「しかし、最近になってある変化が…」というナレーションとテロップとともに、被害者がスマートフォンを操作する写真が映し出される。そして、インタビューを受けた中学の校長や生徒の語りから、学校を欠席していたこと、他校の生徒らと一緒に夜にコンビニにいたこと、先輩から殴られて顔に痣ができていたことなどが伝えられる。このシークエンスでは、被害者がスマートフォンを操作する写真、ピースしている写真、目を細めている写真、顔に痣や傷のある写真など5種類の写真が10回映し出されている。

ナレーションとテロップに呼応するように写真を映し出すことで、「明るく人気者の中学生」と「不良グループの一員」という二項対立の図式が浮かび上がってくるのである。この写真やナレーションによって暗示されたストーリーは、再びスタジオに戻された本報道の中で、キャスターとコメンテーターが使用するフリップボードによって視覚化される

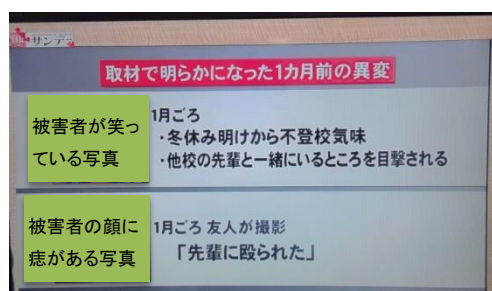


図 2 フジテレビ『Mr.サンデー』2015/02/22

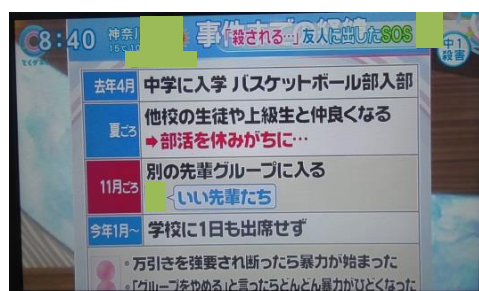


図 3 フジテレビ『とくダネ!』2015/02/24

(図 2)。インタビューによって得た情報と被害者の顔写真によって作成されたフリップボードには、日を追うごとに新たな情報が「事実」として書き加えられていく(図 3)。このフリップボードは、被害者が離島から川崎市(=都会)へ転校してきてから殺害されるまでのストーリー(被害者の履歴)が一目でわかるようになっているのだ¹⁹。

また、加害者についてはまだ特定されていないにもかかわらず、フリップボードを用いて被害者のストーリーが語られることで、「あどけない中学生」を殺害した「凶悪な加害者」を連想させることになるのである。

(4) 献花報道による感情の共同体の形成

本報道では、献花の場面が繰り返し報道されている点も特徴的である。最初(2月22日)に献花が報道されてから1週間後の同番組では、過去の映像と現在の様子が対比されている。そこでは過去の献花の映像(図4)と共に、「事件直後は、仲間たちの供えた、わずかな花束だけだった」と語られた後、現在の献花と献花に手を合わせる人々の姿に画面が切り替わり(図5)、「しかし、日を追うごとに献花は増え続け、事件から9日たった今日も、雨の中、県外から献花を手向ける人が絶えない」と付け加えられる。テレビにおいて報道された過去の事実が、改めて報道価値のある事実となるのである。



図 4 フジテレビ『Mr.サンデー』2015/03/02



図 5 フジテレビ『Mr.サンデー』2015/03/02

献花報道は、各局各番組で頻繁に扱われる手法である。献花が日々増えていく様子を映像という事実を通して見ることで、「事件の悲しさ・重大さ」を改めて実感するとともに、「誰もが同じ悲しい気持ちでいる」ことを知り、感情の共同体が形成されていくのである。

6.4 テレビメディアによる感情の共同体の形成と教育世論

以上、テレビメディアによる教育世論の構成について、教員報道と少年報道を取り上げ、テレビが視聴者を情動的に巻き込むそのメカニズムを検討してきた。

テレビメディアの特徴の一つは、ナレーションや語りといった音声言語に加え、テロップや音響、映像、写真、フリップボードなどさまざまな感覚・メディアを複合的に組み合わせ、その重層的な効果を通して、現実のイメージやストーリーを構成する点にある。特に、教育関連の報道では、教室や入学式、卒業文集、バスケットボールといった学校に関するありふれた素材の活用がさまざまな異化効果を発揮する。例えば、馴染みの学校風景を描きつつも、そこに少年が不在であることをほのめかすことで、被害者の無念さを募らせる効果が生じる。また、テロップや音響、映像や写真はその複雑な文脈や背景をそぎ落

とし、現実をわかりやすく提示するため、視聴者は見えない現実を見る意志も持てず、加害少年への怒りの感情は沸騰し押しとどめようのないものとなる。

また、テレビなどのマスメディアは、そこで報道された情報が当該共同体のメンバー（市民）にとって周知の情報であることを観察可能にするメディアである。あらゆる報道番組で繰り返し報道されるという事実は、そのこと自体が「事の重大性」を伝える効果がある。さらにテレビは、テレビが構成した現実をあたかも自然に生じた現実であるかに報道することで、出来事の意味や意義を拡大して映し出すものとなる。「増え続ける献花」という現象はテレビが作り出したものといえるが、こうした現象をさらにテレビが映し出すことで、視聴者は「この事件の（社会的な意味での）重大性」を再確認することになる。念のために確認しておけば、ここで世論の構成にとってのポイントは「献花が増え続けている事実」が本当に「みんなが感じている」ことと合致しているか否かではない。視聴率を重視するテレビが何度も繰り返し報道しているという事実こそが、「いかに多くの人々がこの事件に関心を向けているか」を示しているのであり、それはまさに世論なのである。（因みに、「川崎市中1男子生徒殺害事」に関する一連の少年報道が行われた直後の2015年3月、少年法改正についての議論や文部科学省が再発防止策を全国の教育委員会や学校へ送ったという事実がメディアによって報じられた。こうした事実からも、政治や行政は世論の動向に、メディアは世論に対応した政治や行政の動きにいかに敏感に反応するかわかるだろう）。

7. 今後の課題と若干の提案

以上、実際のテレビメディアの報道を素材にして、そのリアリティ及び教育世論の構成について検討してきた。本稿では、あくまで二つの特殊事例を取り上げたに過ぎず、より一般性を持つ議論へと展開していくためには、今後さらに事例を積み上げ分析の厚みを増していくことが求められる。また、報道内容の分析だけでは、それが実際の世論形成に、どのような影響をどの程度与えているのかの検証までは至らない。実際の効果について知るためには、視聴者への調査／分析など別のアプローチも組み合わせることが必要だ。さらに、テレビやマスメディアのメディア特性を解明するには、海外のテレビメディアとの違いやネットの影響の分析なども不可欠であり、残された課題は少なくない。

以上のように課題は山積しているが、以下では本稿での分析結果を受けて、さしあたっての結論と展望について言及しておく。

本稿が注目したのは、テレビというメディアは、諸感覚を融合した触覚的ともいえるメディアで部族的（共同体的）な感覚をもたらすものであること、また、視聴者を巻き込むマスメディア・システムとして作動することで、テレビは常に新奇な情報へと駆り立てられるばかりか、視聴率向上の要請など自己準拠的観点からの情報選択圧力を受け続けている、という側面であった。もちろんここで、テレビの持つこうした構造自体を批判したいわけではないが²⁰、テレビなどのマスメディアは私たちのリアリティ構成に多大な影響（判断の根拠自

体)を与えるものであるだけに、そのバイアスに対する配慮は欠かせない。

とりわけ教育は、教師や子どもといった役者が揃い、その語りに誰もが参加でき、解釈の余地も広く、情動的なコミットも誘発しやすいなど、テレビメディアと波長が合いやすい領域であるだけに注意を要する²¹。コミュニケーションには宛先(相手)とテーマ(情報・対象)があるが、人物をネタ(テーマ)としがちなマスメディアには、この社会を傍観者的に観察する側(われわれ)と観察される側(奴ら)に分断する傾向が備わっている。境界線のこちら側で、無垢で傷つきやすい「子ども＝イメージ」が強調されればされるほど、観察する側に立つわれわれは社会的正義の象徴的実現(美しい魂の維持)を求めて、加害者への懲罰要求はもとより、子どもを保護すべき立場にある学校や教師への不満や不信を募らせていく。さらにテレビはこうした(ある意味でテレビ自身が作り出した)市民／視聴者の情動や期待を汲み取り、これを代弁すべく行政や学校への批判や要求(教育世論)を生み出していく²²。

こうしたテレビと私たちの鏡像的關係は、テレビが過度な競争にさらされ、テレビへの不信やシニシズムが蔓延することで増幅される。オールタナティブなメディア活用を促し、テレビ依存から脱却していくことは不可欠だが、テレビをテレビ的手法(傍観者の立場)でバッシングすることは、この鏡像的關係をむしろ強調することになり、自らを袋小路に入り込むことにもなりかねない。とりわけ私たちは、社会の民主化や共通前提の創出など、テレビがもたらす恩恵や可能性についても深く理解しておく必要がある。もちろん市民が、テレビを支配する政治権力や利益至上主義に目を光らせるなど、そのメディアリテラシー(批判力)を研ぎ澄ましておくことは不可欠だが、テレビや新聞などのマスメディアは貴重な「公共財」であることを意識しつつ、高品質な報道・番組を表彰するなど、報道の質を共に支える努力が求められる。視聴率重視の傾向の帰結についても、単にそれを否定・否認するのではなく、実はこれが、私たち市民／視聴者の欲望や鑑識眼の在り方と深く連動したものであることを逆手に取り、中心化する欲望の循環から、他者の遭遇や変容体験をこそ歓迎するなど、脱中心化する欲望連鎖へと転換を促していくことが必要だろう。

注

¹ 本稿は付記に示した科研プロジェクトの一部であるが、研究の位置づけや分析枠組みの提示と実証研究の端緒を切り開くことが主な狙いである。

² 言説研究の蓄積は膨大でここで列挙することは控えるが、広田・伊藤(2010)は、その成果を教育的語りの歪みに、また布村(2013)は、教育改革への影響とつなげてまとめている。なお、この二つの文献にはブックガイドが付いているので、参考になる。

³ テレビメディア分析の端緒を切り開く注目すべき研究として間山・山田(2013)がある。北澤(2015)によるマスメディアの分析も興味深い。

⁴ 世論の流れと政治的思惑が一致したときその動きは加速する。文部行政のいじめ対策や道徳の教科化への流れは、まさにその象徴であるといつてよい。

⁵ マクルーハンは、こうした相互反射的關係をテトラッドと呼び、さまざまな事例を分析している(McLuhan, 1989=2003)

⁶ これまでのマスメディア研究は、「圧倒的なマスメディアの影響力に対して、無力にたた

ずむ人間」(藤竹 2012) という図式に支配されてきた。しかし、実際のところ情報の送り手は視聴者の期待を無視することはできない。

7 マクルーハン (McLuhan, 1964=1967) は技術的可能性から、人間の全体性を回復し、世界を結合する救世主としてテレビに期待したが、文化、言語、国境の壁は予想以上に大きかった。少なくともこれまでのテレビは、地球村というよりは、ナショナリズム (国民的一体感) を強化してきたといえるだろう。

8 こうした状態のメディアがいかなる影響を及ぼしうるのかについては、たとえば新聞が戦争を導いたと指摘する保坂・半藤 (2013) などからよくわかる。

9 永田他 (2013) は、テレビがなぜ劣化してきたのかについて内側から解明している。

10 樫村 (2008) は、ポストフォーディズム、政治のマーケティング化が進むことで、象徴の貧困化が起り、欲望のレベルの政治 (自然権や民主主義の理念を媒介する政治) から、欲動レベルの政治 (刺激への反応) への転換が進行すると警鐘をならした。

11 子どもや教育に関連するニュース及び報道とは、子ども (乳幼児や少年も含む) ・大学生、教師・先生・保育者・保護者・子どもの施設の職員等、学校・保育所・家庭・学習塾など子どもがかかわる施設、子どもや学校に関係する制度や物などが含まれているニュース及び報道を指す。ただし、上記のキーワードが含まれている場合でも、例えば猛暑や海開きといった天気や季節の事柄に関するニュースは、子どもや学校にも触れることもあるが、本研究では対象外としている。

12 同一の報道を何度も繰り返し放送している場合には、報道された回数をすべてカウントしている。内容項目の分類については、小林 (2008) の分析コード表に依拠し、教育関連の「政策」「選挙」「少年犯罪」「事件・事故」「イベント」「社会現象」「裁判」「学校教育」「スポーツ」を設定した。どこにも分類できない報道は「その他」に分類した。また、ここで民放として日テレとフジを取り上げたのは、データ収集の作業者が同一の人物であることによる。

13 萱野・森 (2008) は、フランスでは事件報道はほとんどないと指摘している。

14 カウントの仕方が異なるので比較はできないが、TBS やテレ朝においては、少年犯罪の報道が少ないなど、異なる傾向が見られた。なので、ここで観察された傾向は日テレとフジの局 (放送局のイデオロギーや価値観) の特性が表れたものというべきかもしれない。

15 実際、近年ではこうした危険が増している。この点は池田他 (2014) に詳しい。

16 カット別データの作成にあたっては、吉田 (2008) を参考にした。

17 興味深いのは、この報道がシリーズ化されていく点である。この 1 か月後に教師が休日の参観日を欠席して NHK ののど自慢大会に参加したことが問題化された。このように教師がネタとして消費されることで、その権威もますます低下していく。

18 以後、NHK の報道回数は減るが、民放は 3 月 3 日に被害者の通夜と告別式、6 日にリーダー格の少年の実況見分の報道まで報道回数が多い。

19 フリップボードによる視覚化は、学校や教師への要求やプレッシャーにもなる。2 月 25 日の TBS『ひるおび!』では、被害者の担任が被害者の自宅や母親に電話をかけた日と家庭訪問をした日、川崎市教育委員会と文部科学大臣によるコメントの要約が、フリップボードに表示されている。

20 テレビの触覚メディア的性質は人類を視覚中心から解放したし、広告収入により無料でコンテンツを提供するというのは、優れたビジネスモデルであるといえよう。

21 マスメディアは新しさ・新奇さに注目するので、教育の伝統的なよさは見失われやすい。性急な改革になりがちな理由であり、教師の自尊心にもネガティブに作用してしまう。教育については、現場にもしっかり根ざした専門的な語りを復権させることも必要だろう。

22 こうして加害者や教師を糾弾する教育評論家やタレントは人気者となる。しかしながら、この図式の中で学校が改善されることは困難だ。教師は厳しく責任を問われるにもかかわらず、権威や時間は奪われるからだ。

文 献

- Ariès, Ph. *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime*, 1960=1980 (『<子供>の誕生』杉山光信・杉山恵美子訳, みすず書房)
- Ariès, Ph. "Sur les origines de la contraception en France", *Population*, 8 1953=1983 (『<教育>の誕生』中内敏夫・森田伸子編訳, 新評論)
- 逢坂巖 2014『日本政治とメディア』中公新書
- 藤田真文・岡井崇之編 2009『プロセスが見えるメディア分析入門』世界思想社
- 藤竹暁 2004『環境になったメディア』北樹出版
- 藤竹暁編 2012『図説 日本のメディア』NHK 出版
- 広田照幸・伊藤茂樹 2010『教育問題はなぜまちがって語られるのか?』日本図書センター
- 保坂正康・半藤一利 2013『そして、メディアは日本を戦争に導いた』東洋経済新報社
- 池田恵理子・戸崎賢二・永田浩三 2014『NHKが危ない!』あけび書房
- 伊藤明己 2014『メディアとコミュニケーションの文化史』世界思想社
- 伊藤守編 2006『テレビニュースの社会学』世界思想社
- 伊藤守 2013『情動の権力』せりか書房
- 伊藤守・岡井崇之編 2015『ニュース空間の社会学』世界思想社
- 伊藤守・毛利嘉孝 2014『アフター・テレビジョン・スタディーズ』せりか書房
- 樫村愛子 2008「ポストモダンの「民意」への欲望と消費」『現代思想』vol.36-1, pp.124-144
- 萱野稔人・森達也 2008「民意の時代」『現代思想』vol.36-1, pp.56-73
- 北澤毅 2015『「いじめ自殺」の社会学』世界思想社
- 小林直毅・毛利嘉孝編 2003『テレビはどう見られてきたのか』せりか書房
- 小林直美 2008「何をどう調べるか?——調査の目的と設計」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学—映像時代のメディアリテラシー』新曜社, pp.56-69
- Luhmann, N., 1981, *Politische Theorie im Wohlfahrtsstaat*, Gunter Olzog GmbH (=2007『福祉国家における政治理論』徳安彰訳, 勁草書房)
- 1996, *Realität der Massenmedien*, 2. Erweiterte Auflage, Westdeutsche Verlag. (=2005『マスメディアのリアリティ』林香里訳, 木鐸社)
- , 2000, *Politik der Gesellschaft*, Suhrkamp. (=2013『社会の政治』小松丈晃訳, 法政大学出版局)
- 間山広朗・山田鋭生他 2013「いじめ問題の諸相(2) —「大津いじめ自殺」事件のテレビ番組分析の可能性—」『日本教育社会学会第65回大会発表要旨収録』埼玉大学, pp.276-279
- McLuhan, M. 1964, *Understanding Media – The Extensions of Man*, McGraw-Hill, New York. (=1967『人間拡張の原理』高儀進・後藤和彦訳, 竹内書店新社/ =1987『メディア論—人間拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳)
- 1989, *The Global Village*, Oxford University Press. (=2003『グローバル・ヴィレッジ』浅見克彦訳, 青弓社)
- 永田浩三・水島宏明・金平茂紀・五十嵐仁 2013『テレビはなぜおかしくなったのか』高文社
- 布村育子 2013『迷走・暴走・逆走ばかりのニッポンの教育 なぜ、改革はいつまでも続くのか?』日本図書センター
- 大黒岳彦 2010『「情報社会」とは何か <メディア論>への前哨』NTT 出版
- 吉田文彦 2008「第七章 ニュース映像分析の手法——ビデオ編集ソフトを使ってみる」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学—映像時代のメディアリテラシー』新曜社, pp.96-118

付 記

本研究は、科学研究費助成金「テレビメディアにおける言説・映像空間の特性と教育世論の形成に関する実証的研究」（課題番号 25245075，研究代表者：越智康詞）においてデータベース化をすすめているテレビメディアによる教育言説データの一部を使用する。なお、本研究で作成したデータは教育研究以外では使用しないことをデータ取り扱いルールとしている。

(2015年10月14日 受付)
(2016年 2月10日 受理)